



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

復活節第3主日 A年(2023年4月23日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 2章 14、22—33節

第二朗読：ペトロの手紙1 1章 17—21節

福音朗読：ルカによる福音書 24章 13—35節

『エマオの旅びと』

『エマオの旅びと』堀辰雄(1940年)

「我々はエマオの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるキリストを求めずにはゐられないのであらう。」これは芥川さんの絶筆「續西方の人」の最後の言葉である。「我らと共に留れ、時々に及びて日も早や暮れんとす。」さうキリストとは知らずにキリストに呼びかけたエマオの旅びとたちの言葉はいまもなほ私たちの心をふしぎに動かす。私たちもいつか生涯の夕べに、自分の道づれの一人が自分の切に求めてみたものとはつい知らずに過ぎてゐるやうなことがあらう。彼が去つてから、はじめてそれに氣がつき、それまで何氣なく聞いてゐた彼の一言一言が私たちの心を燃え上らせる。

いま、「西方の人」の言葉の一つ一つが私の心に迫るのも丁度それに似てゐる。例へば「キリストの一生の最大の矛盾は彼の我々人間を理解してゐたにも關らず彼自身を理解出来なかつたことである。」——これまで私たちは芥川さんくらゐ自分自身を理解し、あらゆる他の人間の心を通して自分自身をしか語らなかつたものはないやうに考へがちであつた。しかし、いまの私にはそれと反對のことしか考へられない。芥川さんもやはり自分を除いた我々人間を理解してゐただけである。我々に自分自身が分かるやうな氣のしてゐたのは近代の迷妄の一つに過ぎない。

芥川龍之介は、イエス・キリストと自分とを対比させながら、『西方の人』、『續西方の人』を記しています。天才と自負していた彼にとって、イエス・キリストは不可解な存在だったのでしょ。しかし、『續西方の人』の末尾の文章である「我々はエマオの旅びとのやうに……」をめぐつ

ては、芥川に信仰があったかどうかで研究者の間で議論^{ぎろん}的^{まど}になっています。今日の福音朗読「エマオの弟子^{でし}たちの物語」は信仰者にとっても、そうでないものにとっても何か不思議な魅力^{みりよく}を秘^ひめています。



マリア祭のお知らせ

五月晴れの中、グラウンドで野外ミサをしましょう。

日時：5月21日 午前10時半

ミサ後、お弁当の販売があります。

ピクニック気分で、皆で楽しく過ごしましょう。

なお、その日は、8時半と9時半のミサはありません。ご注意ください。

